

せい えん

青淵文庫



DATA

名称 青淵文庫
 所在地 東京都北区西ヶ原2-16-1
 (飛鳥山公園内)
 完成 大正14年
 設計者 田辺淳吉

美しい曲線を
 描く階段



先 月号に続き、新しい一万円札の肖像に選ばれた渋沢栄一翁ゆかりの建築を紹介する。

青淵文庫の完成は、大正14年（1925年）。渋沢翁の傘寿（80歳）と、男爵から子爵への昇位を祝い、竜門社（渋沢栄一記念財団の前身）から寄贈された建物である。

設計者は、先月紹介した晩香廬と同じく田辺淳吉。本来は、「文庫」というとおり1階に閲覧室、2階に書庫を備え、渋沢翁が収集した論語の書籍や徳川慶喜の伝記資料などを所蔵する小図書館として建築される予定であった。しかし、大正12年の関東大震災で資料の大半が焼失してしまい、完成後は2階に書庫はあるものの、迎賓館として使用されたという。

建物は、大震災後に鉄筋コンクリートで補強されたレンガ造。外壁は、伊豆天城の月出石とタイルで覆われている。

内観で印象的なのは、閲覧室として設計され、主に接客の場として使用されたメインルームだ。入口には、渋沢翁直筆の「青淵文庫」の扁額が飾られている。青淵とは渋沢翁の雅号で、現埼玉県深谷市にあった生家の裏の水が湧き上がる池に由来するといわれている。

室内は、渋沢家の家紋（丸に違い柏）にちなんだ柏の葉や、「寿」の漢字がデザインされたステンドグラスが窓辺を華やかに飾っている。天井や壁にも、見事な石膏による細工が施され、柏の葉を描いたタイルが室内を彩るように各所に貼られている。



渋沢家の家紋にちなんだ柏の葉と
漢字の「寿」がデザインされたステンドグラス



渋沢翁直筆の扁額。装飾タイルにも
柏の葉がデザインされている



様々な装飾で華やかに
彩られたメインルーム

2階の書庫へとつながる階段は、直線を基調とした外観とは打って変わって、優美な曲線を描く。
青洲文庫は、晩香廬とともに、国の重要文化財に指定されている。